

## 播磨国から来た鬼瓦

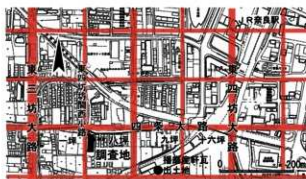
平城京跡（左京五条四坊八坪） 奈良市大森西町

平成23年度にJ R奈良駅から南西へ500mの場所で発掘調査を実施しました。ここでめずらしい奈良時代の鬼瓦が出土したので紹介します。

### 出土した鬼瓦

出土した鬼瓦は「瓦范」と呼ばれる紋様を彫った木型を用いて、鬼の顔を飾った鬼面紋鬼瓦です。本例の拓本を左右反転復元した結果、ほぼ紋様の全貌が明らかとなりました。

鬼面紋は眉間にシワがはいり、目尻はつり上がり、口は大きく裂けている憤怒の形相で、まるで怒声が聞こえてくるような迫りに満ちています。上瞼を波状に曲げた眼の上から、角状突起が上方に伸び、その先端を巻き込んでいることが特徴的です。眉毛は左右に伸びて上方に跳ね上がり、その先端は巻き込んでいます。口の上半部左右には放射状の髭を上向きに、口の下半部左右には放射状の髭を下向きに配し、上方の1本を下向きの巻き毛で表現しています。鬼面紋の外側には、小粒



調査地位位置図 (1/10,000)

で密な珠紋をめぐらしています。外形はアーチ形で成形しています。紋様の高さ・復元幅はともに約25cmですが、本例は外縁を幅広く残しており、外縁を含んだ高さは約32cm、復元幅は約35cmあります。厚さは約5cmです。下辺には半円形の挟りがあり、ここに丸瓦を嵌め込んだものとみられます。

表裏ともに、粘土のかたまりから切り出した際の糸切痕跡を明瞭に残したまま、粘土板を范型に押し付けて、紋様を浮き出しています。



出土鬼瓦



出土鬼瓦復元図

### 鬼瓦が出土した場所

鬼瓦が出土した場所は、平城京の条坊復原では左京五条四坊八坪の北西隅にあたります。

鬼瓦は八坪北西隅を方形に区画する、幅4.8～7.6m、深さ0.3～0.4mの溝から出土しました。方形区画溝に囲まれた方形の内部は、一辺6.0～8.6mの平坦面となっています。溝の埋土の中からは瓦類が集中して出土していることから、平坦面の上には鬼瓦を載せた瓦葺きの建物があった可能性も考えられます。

その他、溝の埋土の中からは、播磨国（現在の兵庫県西部）で作られた軒瓦も出土しました。出土した播磨産の軒瓦は、古代山陽道の駅家である賀古駅家とみられる古大内遺跡（兵庫県加古川市）から出土することから、「古大内式軒瓦」と呼ばれているものです。

今回出土した鬼瓦を「播磨国府系瓦」鬼瓦とよばれている、兵庫県姫路市の辻井庵寺出土品や播磨国分寺出土品（兵庫県姫路市教委所蔵）と実物照合を行いました。鬼瓦は同じ木型から作られたもので、つくり方も共通していることから、播磨国から持ち込まれたものであることがわかりました。地方産の鬼瓦が平城京跡から出土したことは今までありません。

### 鬼瓦が語ること

鬼瓦も「古大内式軒瓦」も、「播磨国府系瓦」と呼ばれる瓦の一種で、「播磨国府系瓦」の出土は、ほとんど播磨国内に限られます。出土する遺跡は、播磨国府が推定されている姫路市本町遺跡や播磨国分寺、古代山陽道沿いの駅家であり、これらは播磨国司が管理する施設であることから、瓦も国司の管理下において生産と配布がなされたものと考えられています。

このような「播磨国府系瓦」が平城京跡で出土した理由としては、平城京内に播磨国司が管理する「調邸」と呼ばれる施設があったからではないかと考えられます。「調邸」とは地方諸国から運ばれてきた調物を一時保管する施設であり、各国の出先機関です。

播磨産軒瓦はこれまで平城京内では、八坪の東隅にある九坪の南辺付近でしかみつかっていません

でしたが、今回の調査で八坪北西端内でも「播磨国府系」鬼瓦・軒瓦が出土したことにより、播磨国の「調邸」は1町以上の敷地を持っていた可能性も出てきました。

平城京跡から出土する鬼面紋鬼瓦は、「平城宮式」鬼瓦と、「南都七大寺式」鬼瓦があります。今回出土した鬼瓦の眼の形や獣木の表現は「平城宮式」鬼瓦とも似ていますが、「南都七大寺式」鬼瓦に見られる珠紋帯もあります。しかしながら、「南都七大寺式」鬼瓦のようなドングリ眼でもありません。眼の上には角状突起を持っていることから、統一新羅の鬼瓦の影響を受けているようです。播磨国の鬼瓦がなぜ統一新羅の鬼瓦の影響を受けているのかは興味深いところです。

鬼瓦の大きく裂けた口は、怒声を発しているのではなく、さまざまなことを私たちに語りかけてくれているようにみえます。



鬼瓦が出土した方形区画溝(南西から)



平城京出土播磨産軒瓦(「古大内式軒瓦」)